

會 報



第 三 年 第 八 号

昭和七年十月二十五日発行

通卷二十三号

マッターホルンの北壁

(フランチツ及びトニー・シユミット兄弟の登攀)

本編はシユミット兄弟が本年二月二日英国山岳會の席上に於て講演せしものを同會のボウマン氏(E. Noel Bowman)が筆記せしものなり。

アルパインジャーナル一九三二年五月号(浦松氏所有)

× × × × ×

當時ツエルマツトに滞在して居た山岳會員諸氏は昨年七月三十一日(金曜日)に、アルプスの最後に残された大きな未解決な問題の一つ、マッターホルンの北壁が今や決行されてゐるといふ報道を知った時の同地の輿論の有様を却忘れなき事と思ふ。ヘルンリーの小舎番から村に電話によつて報告されたのは次の通りである。

マッターホルン氷河の上、巨壁を二人の独逸人が緩りではあるが確實なる足取りを以て突進してゐる。

る。

夕方になつて彼方が見えるといふ事が解つた時にはホテル、モン、セルバンの前に具へられた望遠鏡の周圍には多勢の人々が集つて来た。此の二人の独逸人はミユンヘン在住の *Frangy and Toni Schmidt* と云ひ、独逸山岳會のオーバーランド・セクションに属し、工業学校の学生であつた。凡そ金持とは縁の遠い身かであつたのでミユンヘンからツエルマツトまで(凡そ東京、大阪以上なり)ハルト、自転車を利用して来たもので、途中ボーデン、ゼーで船を利用したに過ぎなかつた。彼等は此の數年間一緒に東部アルプスに於て可なり登攀に何度も成功して居た事は既に報道されてゐる通りである。

七月廿八日(火曜日)に二人はテントを約二千四百米突の高崖を有する北壁の根元へと張つた。翌る廿九日は北壁の下部を為す大きな氷斜面下にあるマッターホルン氷河のセラツクス中に於て最良の道の発見に費された。三十日は戦闘の前の休養日とした。

その夜十一時半、眼覚時計は二人の假睡の夢を破り、テント外、寧ろ熱苦しい夜の中にと駆り立てたのであつた。

四周の風物は總て皎々たる月光に輝いて居た。

尺マツターホルンの巨大なる陰影のみがツムツトの谷を殆ど呑み盡す許り。簡単な朝食の後いよいよ出発したのが七月三十一日午前。時十分。ウラソツは沢山の氷及び岩用のピトン、その他カラビーンネル、細引、グムのテントサツクと少し許りの食料等を入れたりユツクサツクを背負ひ、トニーは四十米突のザイル二本と二人のクランポンを持った。

午前二時、ヘルンリーのスミス山岳會小舎に達し、之から火をつけやうとしてゐた登人を駭かし、一吾々は之から北壁をやるんだから、他のパーティーの人々に石など落さぬ様に注意して下さいと頼んだ。

それから二人は大意でマツターホルン氷河の下の台地に降り、クランポンをつけてから、落ちたセラツクのデブリを攀ぢ越へて、暫くして北壁直下の「上方台地」に辿り着いた。

此の地点から上方の氷斜面は約六十度の傾斜を有し、一千呎続きその先はだん／＼真黒い垂直の岩の中に消えて行つて居る。急峻な雪崩の崩壊物の上を登つてから三時四十五分にグワツと許りに口をあけたベルグシュルンドに達した。次の数分間の間に、シュルンドの上の方のリップスを転落して来る雪や氷の碎片に埋まされ乍ら四十米突のザ

イルを結び合せ、ピトンやカラビーンネルを二人で分担した。

四時になった、そして曉の曙光は皎々明瞭にふつて来た。トニーがまづ最初に、落ちて来る岩や氷によつて深く別られてゐる急斜面を登りはじめた。時間と距離の節約の爲に、足場は切らずに、クランポン及びリीडールによつてザイルの先端に當る所に打込まれたピトンに專ら信頼をして行つた。勿論、数百呎上方からの落石に対する避難場所は全然なかつたので、小休みもなく、そのまゝの動作を暫時の間繰返して行つたのだ。遂に陽が出やうとする時になつて、氷を透して下部に非常に平滑で、鈹薬でもぬつた様な岩肌が露れて来た。確保をする方法が全然なくあつて来たので行進は勢ひ、緩慢ならざるを得なくなつて来た。ホルド毎に氷や雪を除かなければならなかつた。石上方に大きなガリーの基部があつた。それは左から右へと急峻な傾斜を爲しつゝ、頂上の下部約千七百五十呎の所にある最後の壁に終つてゐるものである。此のガリーは下から観察した通り全くツルツルで手懸りも何もないのであつたが、怖るべき北壁の登攀には唯一の通路であるのだつた。問題は如何にして此のガリーの基部に達するかであつた。然し乍ら其処への横断は非常に危険に

見えた、とるべきルートは殆んど垂直の一枚岩の上を斜に登ってゐる。そしてその上には三寸位の薄氷が張られてゐるのだ、尚多少その面下の射滑状の岩によつて切斷されてゐる所もある。此処を横斷するには、下の岩肌からこの氷の薄層をはぎとらぬ様にクランボンの先を一寸ひつかける位の切目しかカットする事は出来ない。

まだるつこい又非常に無格向なバランスのトリックをやリながら、遂にトニーはリブの先端にとりつく事に成功し、次でザイルの許す限りそれに沿つて登り、此処で先頭をフランクに譲つた。彼は次の二百呎でガリーの入口に到達し、尚約七十呎その中を攀ぢた所に止まり、トニーを待った。其処は実に全北壁中に於ける唯一の休場である岩の出張りであつた。此処で板チョコを啗り、再び行進を開始した。

徐々に而も確實に、二人はガリーを突進した。岩は非常に脆かつたので時には中央を走り下る氷の地帯を直登し、他の場合には右手の岩場を攀ぢて行つた。一度は左手の容易相に見える岩場の方へ行つてそれが豫期に反したものである事が解かり、再びガリーに戻るのくひどい目にあつた事もあつた。大小様々な岩がひっきりなしに落ちては来たが二人はいつても幸運にも、その弾丸の通

る道からは外れて居た。

遂に陽が西方に沈みかけた時、フランクはガリー中でザイル一杯の最後の登攀をやりはじめた、血を湧きた、す様ふチムニーを過ぎ、小さな垂直の氷壁を終ると俄然北壁そのもの、一枚岩に登りつめたのであつた。薄気味悪く氷で光つてゐる暗黒の溝が左方へ一肩しまで続いてゐる。其の肩の所に遅ればせに頂上を後にしたパーティーが居て、その聲さへも聞えて来る。一夜を過すべき場所の問題が彼等の心を支配しはじめた。といふのは譬へ僅かの間にしろビグアイクは避け得られぬと感じたからである。然し何処に？ 見廻した所、一箇所だつてこれからの数時間を過すに足るべき格向な場所は見當らないのだ。

今や先頭を切つてゐるトニーは咽喉の乾きに苦しめられ、指先は血ににじみ、寒風に固くなり乍らも遮二無二の苦登を続けて行つた。

二人は今や急速に疲労を感じてゐる様になつて来たが困難は減る所の騒ぎではなかつた、岩骨、氷溝、水の流れを只繰り返す許りで全く單調なものであつた。今や鋼鉄の大索の様に固く凍つてしまつたロープを旨くさばく事は全然不可能になつた。一時間後には夜の暗黒は遠慮なく押進つて来、あまつさへ霧の渦巻がむく／＼と彼等を取りかこん

でしまひ、明日は一体どうなる事やら見當がつかなくなつて来た。二人がまだ此の壁の上に居る間に天候の変化にでも遇つてしまへば最早成功の望みはなくなるのだ。

此の時又先頭になつてゐたランツが遂に左方敬ヤードの地点、なぞ落した様な峻壁の真只中に外方に傾いた小さな半畳敷位の岩株を見付け出した。此の棚へトラバースする時にも少しの所で一大事にならうとしたアクシデントが起きた。ランツはトニーより約十呎上の非常に足場の悪い所に居た、之に反しトニーの場所は安全であつて兄の好位置に移るのを確保して居たのである。と突然何等の豫告もなくトニーの立つて居た岩が思ひきりよく剥れて、氷河の方へガラ／＼と落ちてしまつた。勿論トニーは落ちた、落ちたが直ぐ懸命に岩の出張りを掴んで、此の急崖でブラリンになつてしまつた、然しランツは彼を新しい足場までひっぱり上げてやり、危く虎口を逃れる事が出来た。

斯くして遂に午後八時三十分先の岩株の上に達した。此處は約四千五百五十米突の所である。徹夜の仕度の出来上るまでには尚暫くの手間が必要であつた。まづ第一にお粗末な座敷の上にある氷や雪を拂ひ落し、自分の身体を支へるべきピ

トンを用ひ深く打込み、その後でアックスやクランポンを他のピトンに結びつけ、最後にテント、サツクの中へむぐり込んだ。全く彼等は此の底の知れない奈落の上に只マバランスを失はぬ様と思ふ許りで、蹲まり、否寧ろ吊り下つたのであつた。非常なる注意を拂ひつゝ、リュックサツクからパンやベーコン、チーズ或は乾果物を取り出した。後の用意に最小限を残して彼等はそれをむさぼり食べ、それが終つてきて次の夜明けを待ったのである。幸にも天気は好転し来り、霧も消え去つて、後にはすき透る様だ、星夜が展開されて行つた。氷の様な冷ひ風が突然起つて来て、濡れた上衣のまゝでちびこまつて、つてゐる蒔いグムのサツクを膨らませた。八千呎も下にあるツェルマツトの燈火は二人に世の中にも温かさや安易といふものがあつたのだといふ事を思ひ出させるのであつた。夜は遅々として進まず、而も彼等は此の限られた狭い場所では位置をかへる事も出来ないので、幾度も座掌に襲はれたのであつた。

(前編の終り)

(熊)

八丁湯など

暫く行かないと山の様子が大分変わるものです。八丁湯に番人の居る木屋の出来た事は仄かに聞い

てゐたが、今度の平家蟹氏の紀行を見ると更に新しい道が出来た様に思はれる。尤も説明されてる道の大部分は五年以前にも出来てゐた事は出来てゐるが、川俣温泉の説明が少い、と云つて僕が何も詳しく話す材料もないが、八丁湯から川俣への道はそれ程悪くない。日光沢から八丁湯への道に勝ること数等である。但し川俣から鬼怒川を渡つて西沢金山に行く道、この道が面白くないと云へば面白くない。川を渡つて直ぐ三百米程急な登りだ。まるで烏帽子岳への糠坂みたいだ。川俣のびた旅人ならきつとへト／＼になるだらう。

川俣の宿は一軒、しかも古い建物。夜、女の来ることと確かの様だ。當時若かった僕でもカンでピンと来た。但し一休みして飯を食つたゞけて泊つて実験しなかつたのは残念。長蔵小舎でペンちやんに別れて日光へ出たこの七月の旅で忘れられないのは鬼怒沼林道の中で豪雨に打たれて骨の底まで凍えて縮み上つた事と、鬼怒沼の夢幻的な風景と西沢金山の櫓屋に踏込んで、折からの篠突く雨と、その幽霊でも出さうな惺惺なシーンに足が立ちすくんで、午後二時といふに番人の家に泊り込んで了つたこと。この金山も最近新聞の報ずる所によれば、日本鉱業の手に入つて再び活動を始めるとか。

四万法師間赤沢林道のヒュッテに落書があつた由、但し筆者の見知してゐる点と多少違ふのは、後から狸でも矢立で書き直したのかも知れない。山の風致を害する落書を極力止めた筆者である事を知つて戴きたい。それが隅の方にも本校某運動部の名を見るやムラ／＼と懐しさの萌して、若い連中唯棄すべきプチヒロイズムの感情から或は商大の名をならべて書いたかも知れない。但し個人個人の名前は決して並べなかつた事は断言できる。これは或学校会社団体の山岳部の名に於てする落書へよく中学生なんかややる／＼ならば、断然とがめる必要（権利と義務）もあらうが、山の美山に對する愛に對して門外漢なスポーツマン（此場合登山家を含まない）のつら／＼とやつた事だから見逃してやつて戴き度い。送別懇親旅行などに俗化せぬ山を選ぶ場合には今後よく注意する様申し聞かして置かう。あの小舎は余り眺望のよい所に建てられてないこと。他の人の云ふ程きれいなものでないことは確かだと思ふ。糸解はもう止さう。大牟田へ行つたら、又山と近くなるから続々山の話をこの会報にも載せる様にならうと思ふ。

(K A B O T C H A)

山と友

大抵の人は山に行く時友を誘ふ。そして体力の均衡といふ点を此の場合考慮しないことが多い。山に登り初めると疲労の度は体力に反比例して現はれて来る。そして弱い人は遅れ勝ちになり、一度休むことを希望する。茲に同伴者が平生より非常に親しいか肉親の者か、夫婦かならば問題はなぬ感情が起り易い。針葉樹會メンバーの中にも終日一語をも交へずに歩いたといふ様な記憶を有する人があるかも知れない。斯様な現象は單に体力の相異によつて起る許りでなく意見の相異による場合も多い。例へば豫定を変更して別の道を選ぶとか、天候により引返す場合など起り易い。些細の感情から初つて同伴者が休むと言ふと休まないと言ひ度くなることがある。僕の会社の人で山に登る途中から変な感情になり二人で互に先陣を爭ひ、西沢を遡つて国師の小屋迄言葉も交さずに登つたと言ふ話を聞いたことがある。それでも帰りの汽車では大抵の場合に愉快に談笑する様になるものだが、甚たしい時は汽車中でも言葉少なくなることもある様だ。兎に角多少でも感情に疎談が生じると登山本来の意義は無くなると思ふ。山の法悦に浸るといふことは到底出来ないことになる。

山に登る時考なしに友を誘ふことは此の意味に於て寒心すべきことである。適當な同伴者を得難き時は單独で歩くことをお薦めする。單独では不可能なる時は中止するがよい。

made in Japan.

マロリー G. L. Mallory が一九二二年の *The alpine Journal* に載せた "The second mount Everest Expedition" の末尾の方に左の文章がある。

So calm was the air that even with a Japanese match, after a dozen trials or so, we lit our candle.

これは二五〇〇〇呎位の処に於ける記事であるが、日本製のマッチが此の歴史的なエグゼスト登攀に参加してゐたことは非常に興味あることと思はれると同時に當時日本製のマッチが如何に普及してゐたか及び一般に如何に粗悪視されてゐたかの例証とするに充分であらうと思ふ。

(一九三二—一〇—二一)

(蟹)

夏山記録續

- 6、槍平、總高嶺走、高見 要
- 八、二、上高地—中尾峠—總高温泉
- 三、温泉—槍平小屋

四、槍平―槍肩ノ小屋

五、風雨滞在

六、肩ノ小屋―南岳―北穂―穂高小屋

七、小屋―涸沢を下る―横尾―上高地

7、第二次上高地キャンプ

八、増山、清水、太田及吉沢(松)、東京より上

高地へ来る。雨のため天幕を張れず清水屋

泊、

七、玄文沢に天幕を張る。午后高見穂高小屋

よりひよっこり来る。

八、西穂岳へ

九、明神池へ散歩

一〇、高見帰京、増山、清水、吉沢、太田霞沢

在股へ行くも三本槍よりすこし下で引き返

へす。

一一、滞在

一二、涸沢入り、

一六、増山、清水、吉沢、涸沢より下り天幕を

たゝむ、吉沢、清水は帰京、増山はひとり

平湯へ。これで今年の上高地のキャンプも

さゝやかに終る。

8、涸沢池、平生活、増山清太郎、清水達雄、

吉沢松次郎、太田又一、

八、一二、晴、上高地―横尾―涸沢池、平幕営、

一三、晴、池ノ平―北穂―唐沢岳―穂高小屋―

池ノ平、北穂へは北穂から池ノ平へ落ちる

沢をのぼる。

一四、晴、北尾根へ、池ノ平―五、六峯ザツテル

―前穂―奥穂―穂高小屋―池ノ平

一五、晴後雨、太田帰京、清水、増山、吉沢は

奥のゲヤンダルムへ行くが雨のため引き

返へし穂高小屋泊りを余儀なくさせられる。

一六、穂高小屋―池ノ平天幕地―横尾―上高地、

9、乗鞍、御岳山麓行、増山清太郎

八、一七、晴後曇、上高地―中ノ湯―平湯

一八、曇、平湯―平湯峠―駄者―九藏、

一九、曇、九藏―寺村―上ヶ洞

二〇、曇、上ヶ洞―十三曲峠―長峰峠―西又、

二一、雨、西又―黒沢―木曾福島、

10、谷川本谷湖行、十合健二、他一名

七、六、晴、上野―水上―谷川温泉

八、雨、滞在

九、晴、谷川―手首―細芝沢出合―滝―露営

地

一〇、晴、露営地―オジガ沢ノ頭―谷川岳―天

神峠―谷川温泉―水上―帰京、

11、谷川岳、高見要、他一名

七、一〇、晴、湯檜曾―土合―西黒沢出合―谷川岳

12. 野尻湖畔天幕生活、林 俊介、他六名
 七、八、柏原―野尻―(舟)―土ヶ崎、外人村東方立
 上に幕営、
 二二、黒姫山へ
 二四、飯綱山へ
 二六、斑尾山へ
 13、唐沢池ノ平生活、望月達夫、他三名
 七、二一、晴、松本―中ノ湯―上高地―横尾岩小屋
 二二、晴、岩小屋―池ノ平幕営
 二三、前穂北尾根へ
 二四、奥のジヤンダルムへ
 二五、滞在
 二六、北穂高へ
 二七、奥のジヤンダルムへ
 二八、幕営地―上高地―松本
 14、妙高山 林 俊介、他六名
 七、二八、野尻湖畔―赤川―田口―赤倉ホテル
 二九、滞在
 三〇、赤倉ホテル―頂上―ホテル、
 15、峠峠越及蓼科高原 林 俊介
 七、三〇、田口―松本―湯ノ原温泉
 三一、湯ノ原―牛立―蓼鉢泉―峠峠―和田―(自
 動車)―長久保新町。

八、一、新町―大沢ノ入り―途中より笠取峠道へ
 攀ぢる―鳴石―蓼科牧場―桐陰高原寮
 二、滞在
 三、寮―牧場―雨境―芦田村―(自動車)―大
 屋―帰京。
 16、軍刀利山、林 俊介、酒井賢一郎
 五月初旬、新宿―上野原―上岩―軍刀利神社―軍
 刀利山―井戸―向風―上野原、(完)

會員消息

茅川総一、大坂市面淀川區北蒲江日本ペイント株
 式會社自治寮
 園山徳三郎、日本橋區協和面酒店勤務
 中森長太郎、大牟田市三池窒素工業株式會社勤務
 高木英二、十月九日上京、當日同氏歓迎会(針葉樹
 會)に出席、十六、十七日の休みには国立に
 於て月見を兼ねて山小屋へ泊る筈であつ
 たが生憎の雨で取止め、熊さんの宅で送
 別會を行ふ、来る者 吉沢、松本、村尾、近藤、高
 木、高橋、半塚、翌十月十六日櫻にて帰阪。
 中川孫一、十月二日會社の旅行で修善寺、天城山、
 八丁池、萬三郎は時間の都合で行けなかつた由、来る三十日には紅葉見物に柳沢峠越をや
 る由、多摩川上流の旅はかねてからプログラムの一だか
 らと。